

リテハ、ヨキヒトトノニテサフラハバ、ソノフミドモニカ、レサフラフニハ、ナニゴトモノスグベクモ候ハズ。法然上人ノ御オシヘヨクノ御コ、ロヘタルヒトノニテオハシマシサフラヒキ」と、極めて信頼に満ちた言葉を附け加えておられるのである。

また、聖人のつねの言葉として覺如上人は「信誘トモニ因トナツテ、同ウ往生淨土ノ縁ヲ成ズ」という一語を擧げておられるが、これは唯信鈔の「信誘トモニ因トシテ、ミナマサニ淨土ニムマルベシ」を承けられたものであり、唯信鈔文意や一多證文意の卷末の「コ、ロアランヒトハ、オカシクオモフベシ、アザケリヨナスベシ」の附言は、唯信鈔の最後に「コレヨミン人、サダメテアザケリヨナサンカ云々」とある語と相い通ずるものである。次に、正像末和讃の「願力無窮ニマシマセバ、罪業深重モオモカラズ、佛智無邊ニマシマセバ、散亂放逸モステラレズ」は、唯信鈔の「佛力無窮ナリ、罪業深重ノ身ヲオモシトセズ、佛智無邊ナリ、散亂放逸ノモノオモスツルコトナシ」の語を承けられたものであり、「無明長夜ノ燈炬ナリ、智眼クラシトカナシムナ、生死大海ノ船筏ナリ、罪障オモシト歎カザレ」と「如來大悲ノ恩徳ハ、身ヲ粉ニシテモ報ズベシ、師主知識ノ恩徳モ、骨ヲクダキテモ謝スベシ」の二首は、聖覺の法然聖人佛事表白文の「誠知無明長夜之大燈炬也、何悲^ニ智眼闇^ニ、生死大海之大船筏也、豈煩^ニ罪影重^ニ」と、「情思^ニ教授恩徳^ニ、實等^ニ彌陀悲願^ニ者歟。粉^ニ骨^ニ可^レ報^レ之^ニ、推^レ身^ニ可^レ謝^レ之^ニ」とある語によられたものであることは明らかである。また宗祖が晩年の御消息の中に師法然に對しては、いつも大師聖人の敬語を使

つておられるが、この敬語も聖覺の表白文に「大師聖人同學等云々」とあるのを承けられたようである。かように宗祖独自のものとして考えられた感銘深き和讃や法然上人への敬語が、聖覺から出ていることを知つて、今更の如く驚くのである。

その他、尊號眞像銘文には、師法然の次に他師に比べて最も長文の銘文が掲げられていることも注意すべきである。殊に聖覺に對しては、「聖覺和尚ノタマハク」とか「聖覺和尚ノタマヘルナリ」という、全く恩師に對する敬語が使われている。また初期教團の光明本尊には師法然の次に聖覺が載せられている。これは聖覺を敬慕された宗祖の精神が、初期教團に反影していた證據であらう。

要するに、宗祖の一生を貫く求道問法の態度と、晩年に聖覺を恩師の如く敬慕された事實とを睨み合せ、且つまた唯信鈔見寫の翌年に自力執心への内省があり、引きつづき歸洛された事實を思い合わすとき、宗祖の歸洛はひたすら善知識を慕い、専ら問法のために旅立たれたと見るのも強ち無理ではなからうと思ふ。

正信偈和讃の開版に就いて

佐々木 求 巳

巷間に、淨土眞宗が隆盛になつたのは、正信偈和讃と、御文と御傳鈔の力だと言ふ傳へがある。左程までに淨土眞宗と正信偈和讃は切り離す事が出来ないが、その出版に關しては案外に調査されてゐない。小生はここ數年文明五年の蓮如開版以來、

如何に開版されて来たかを調査し來つたが、あまりにもその數の多いのに驚いた次第である。年表を示せば、一目にしてその姿を知り得るのであるが、紙數の關係もあり、それも許されないので、今はその概要を述べる事とする。

現在までに小生の調査し得た版數は次の如くである。(明治元年以前)

	版形數	與付の異れる刊行數	實在數
正信偈和讃(四帖本)	53	68	67
〃(稽古本)	50	55	49
正信偈(單行)	2	2	2
三帖和讃	7	9	8

以上の數の中には講録等に引用されたもの、又、教行信證の一部として出版されたもの等は含まれてゐない。又、實在數は小生の實見を主とし、それに確たる記録に據るものを加へた。

正信偈和讃はかく多くの出版を見てゐるのであるが、その大多數は、民間の買林の手に成つてゐる。即ち、この中で本山版は

本願寺分派以前	3
東本願寺	5 ^① (6種)
西本願寺	7(10種)
專修寺	3
佛光寺	3
興正寺	3

だけであり、他は總て民間書林に依り開版されたものである。^②

東本願寺版、五版の中三版は教如版であるので、普通、教、

常、乗如、の三版と言はれるが、これに對し、西本願寺版は、良、寂、法、文、本、廣の諸代に刊行を見て居り、(法、文、廣如版は同版の刊記改刻とは思はれるが)、廣如の代の如きは四度までも開版されてゐる。(併し、御文は東本願寺に於ては、各代に五帖本があるに對し、……琢如のみ未見……西本願寺版は各代には無い。)

併し、これ等の數は、淨土眞宗なる大宗團の本山版として、決して多いとは言へない。我々は、寧ろ、民間書林の努力に感謝しなければならぬと思ふ。

所謂、在家用の假名書稽古本の出版の嚆矢は、貞、亨元祿の頃と思はれる。現在知り得るものは、東京、淺野辰量氏藏の「貞享四丁卯年三月上旬、京堀川四條下ル角、松葉軒板行」なる刊記の存する一本であらうが、この頃に、貞享五年の吉身屋藤九郎板、元祿元年、同二年の松葉軒板が現れてゐる。四帖本には、これ以前と思はれる坊刊本もあるが、この假名書稽古本の開版が、如何にその普及に力があつたかを考へる時、此等の書林の功績も、もつと大きく評價されなければならない。教行信證の刊者たる中野道伴の功績に比し、決して、松葉軒等の功績が、劣るとは考へられない。

此等の出版に關係した書林は、大體京都であるが、大阪に六軒、江戸に九軒あつて、その版種は大坂九種、江戸七種ある。この他の地には、今までの調査では見出し得ない。

その初見は、京に於ては、先に挙げた松葉軒版であるが、大坂に於ては、正徳三年の心齋橋住の瀬戸物屋傳兵衛版である。流石に、淨土眞宗門徒の少い江戸の非常に遅れて居り、漸く、

文政十三年に到つて、大嶋屋傳右衛門版の開版があつた。

尙、正信傷和讃開版の圖示は、近刊の眞宗研究に付加へてあるから參考にされたい。

- ① 教如版は三版とその入交版がある。
 ② 文明本の複製本等は本山版か否か明でない。
 ③ 四帖本にはこれより先に坊刊と思はれるものもあるが、刊者を明にし得ない。又、禿氏祐祥氏は、眞宗濫古圖録第二輯に、寛文年間のものを見たる事あり、と記して居られるが、確たる事を記して居られないので、此の本の事は他日の研究にゆずる。

宗祖と三善、井上兩族に就いて

寺 西 惠 然

宗祖時代に三善一族が如何に東國方面に活躍して居たかを、「東鏡」、「玉葉」、「大日本史」等を通して見ると

三善爲行 久安四年 下總介
 同行衝 承安元年 能登介
 同 爲則 治承元年 越後介
 同 盛俊 同 三年 武藏權守
 同 倫重 承元三年 越中大掾
 同 康俊 寛喜元年 加賀守
 同 盛俊 治承三年 武藏權守
 同 倫康 安元二年 武藏權守

頼朝と兼實とを結ぶ介在者はこの三善氏であることは既に明かである。其の基點となつて居る人物は三善康信で出家して善

信と云つて居た。彼が幕府の問注所の執事となり加賀守となつてから突如としてこの一門が東國北國に姿を現はして來て、善光寺再建の頼朝の事業に源氏一族とこの一族とが力を合せて造營にかかつてから幕府と北越との道路が完備し、信濃源氏の北越、信濃の交流がはげしくなり三善一族との提携がしげくなつた。

その信濃源氏の一流に井上氏があつて、この一族が宗祖に歸依して佛教者となつて一門が次第に繁榮し所領があつたが爲め經濟的にその繁榮をいよいよ大ならしめた。この井上氏に出家して宗祖の門侶として「交名」に名をのこして居るのが善性の系統と西念の系統で何れも井上の一族であるが、原始眞宗教團中の重要人物で、表面に名を表さないが内面的に充實した信仰と經濟力をもつて、ある意味に於ける原始教團の中心をなし、基點となつて居た。

坂東本(教行信證)を一時所有して居たのもこの善性の系統の明性であり、大谷本廟の所謂、屋地手繼所持目録を保管したのも飯沼善性房子息智光房とである。弘安三年十月二日日附で書かれて居る。文永九年から九年目である。この善性も西念も悲痛な人生體驗の所有者で、そのため一層深く宗祖の説かれる本願の宗教に感動したのであらう。即ち苦惱の有情の一人として宗祖の教に深く歸入したのであらう。

善性の親である井上滿盛は「東鏡」の元暦元年七月十日の記述によると、「井上太郎光盛駿河國蒲原驛に於て誅せらる。是れ忠頼に同意の聞えあるに依つてなり」とある。寺傳はこの光盛を滿盛としてあるが、誅された人物であるためわざわざ滿